

## 創立130周年を迎えた附属臨海実験所

赤坂 甲治 (臨海実験所所長/生物科学専攻 教授)

**理** 学系研究科附属臨海実験所は2016年で創立130周年を迎えた。これを記念して、2016年11月21日に小柴ホールにおいて、国際学術シンポジウム (International Symposium in Commemoration of the 130th Anniversary of MMBS) を開催した。臨海実験所が三浦に設置されたのは、世界でもっとも生物相が豊かで、多様な海洋動物種が得られることによる。創立以来、本学はもとより国内外から多くの研究者や学生が訪れ、海洋生物の研究、教育が行われてきた。とりわけ優れた研究として、井上信也博士による偏光顕微鏡の開発とウニ胚を用いた細胞分裂装置の発見、団ジーン (Jean Clark Dan) 博士による受精における精子先体反応、毛利秀雄博士による微小管タンパク質チューブリン、金谷晴夫博士による卵成熟ホルモンの1-メチルアデニンの発見など、枚挙に暇がない。シンポジウムでは、福田裕徳理学系研究科長の挨拶に続いて、筆者が臨海実験所の歴史を紹介し、臨海実験所を拠点として現在行われている研

究について、生産技術研究所の巻俊宏准教授、理学系研究科地球惑星科学専攻の遠藤一佳教授、国立科学博物館の藤田敏彦グループ長 (生物科学専攻教授併任)、大気海洋研究所の木暮一啓教授、附属臨海実験所の吉田学准教授が講演し、最後に理学系研究科と学术交流協定を締結しているワシントン大学フライデーハーバー臨海実験所 (Friday Harbor

Laboratories, The University of Washington: FHL) 所長の、ビリー・スワラ (Billie J. Swalla) 教授が臨海実験所の将来的な役割について講演した。東京大学動物学教室初代教授エドワード・モース (Edward S. Morse) 博士の御子孫のパトリシア・モース (Patricia Morse) FHL客員教授も出席され、活発に議論が行われた。



シンポジウム会場での集合写真

## 光量子科学連携研究機構発足 知の協創世界拠点に

湯本 潤司 (光量子科学連携研究機構長/フォトンサイエンス研究機構長/物理学専攻 教授)

**理** 学系研究科、工学系研究科、物性研究所では、2016年度に創設された「東京大学連携研究機構」制度を活用し、同年12月1日に光量子科学連携研究機構を発足した。本連携研究機構は、理学系研究科附属フォトンサイエンス研究機構、工学系研究科附属光量子科学研究センター、物性研究所附属極限コヒーレント光科学研究センターの3組織を中心として構成し、各組織間の連携による学術研究、産学連携を加速させると共に、多様な組織から人材が集積している特徴を生かし、将来の中核人材育成を推進する「フォトンサイエンス知の協創プラットフォーム」の実現を目指す

ものである。具体的には、

- (1) 光科学関連研究分野の連携による研究の加速と医学、生物学、薬学、農学など異分野との連携構築
- (2) 他大学、国研、産業界を巻き込んだ大型プロジェクトの中核としての求心力の構築とその連携を活用した新規プロジェクトの企画・実施
- (3) 海外の研究機関、企業との連携・協働関係の構築
- (4) 多様な組織で構成されるプロジェクトを活用した若手研究者の育成を推進する。また、すでに取り組んでいる「先端光量子科学アライアンス」、文部科学

省革新的イノベーション創出プログラム (COI STREAM) 「コヒーレントフォトン技術によるイノベーション拠点」、「最先端融合科学イノベーション教育研究コンソーシアム」に加え、今年度採択された新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) 「高輝度・高効率次世代レーザー技術開発」などのプロジェクトを推進するにあたり、その活動の中核としての役割を担い、卓越した知の創出、その社会実装への展開にもつなげ、新たな社会的価値創造に貢献する。